

Collaboration and Spectatorship : Diverse Equilibria in Sino-Japanese Multiparty Interaction

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: YANG, Yilin メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00064099

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



協働と観賞 — 日中多人数インタラクションに見られる多様な均衡性 —

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

楊 一 林

要旨

本稿は日中母語場面での多人数会話インタラクションにおける参与形態のあり方をマルチモーダルコミュニケーションの観点から明らかにすることを通じて、参与枠組みの汎用性の検証並びに枠組みの精緻化を目指すものである。具体的には、同じ職場で働く日本語母語話者グループ (JPG) と中国語母語話者グループ (CNG) の自然会話の質的な分析を通じて、多人数インタラクションでは、言語の異なりによって、均衡な参与形態の中で異なる選好傾向が見られること、特に性差が均衡性の異なりにかかわっている可能性を示す。

分析に用いたデータは日本語母語話者グループ (JPG) と中国語母語話者グループ (CNG) 3名の自然会話データである。動画解析ツールELANを用いて分析をした結果は、JPGの場合、会話インタラクションの受け手は、頻繁な相づち、共感表現やオーバーラップの使用、また頷きや笑いといった行為によって、話し手と受け手が協力的・動的にインタラクションを構築していく「協働型均衡」の参与形態を選好する傾向が見られた。一方、CNGは会話インタラクションの受け手は、話し手との発話行為や注視行動によって、話し手と受け手が親密な関係性を相互に・対等に深めていく「観賞型均衡」の参与形態を選好する傾向があることを明らかにした。以上の分析は、多人数インタラクションがいかに行われているかを示し、日中の職場で起こりうる多様な均衡性をより広く理解する端緒を提供する。

キーワード

参与枠組み, 参与形態, 日中母語話者, 協働型均衡, 観賞型均衡

Collaboration and Spectatorship: Diverse Equilibria in Sino-Japanese Multiparty Interaction

Division of Human and Socio-Environmental Studies
Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

YANG Yilin

Abstract

The purpose of this study is to verify the participation framework versatility and refine the framework by clarifying the form of participation in multiparty conversation interaction in the Japanese-Chinese native language scene from the multimodal communication perspective.

Specifically, through a qualitative analysis of natural conversations among a group of native Japanese speakers (JPG) and a group of native Chinese speakers (CNG) through multiparty interactions, different

preferences tend to be observed in a balanced form of participation due to different languages. In particular, gender differences may be related to differences in balance.

The data used in the analysis include video footage of two groups collected in Japan and China. The participants were JPG and CNG, who are close colleagues. As a result of the analysis, the JPG and CNG participants deepened their intimacy through speech and built an equilibrium interaction in order to participate in the conversation. However, the Japanese group preferred to participate in a "collaboration equilibria," in which the speaker and the receiver build interactions in a cooperative and dynamic manner. Meanwhile, the Chinese group of speakers and receivers preferred to participate in an "spectatorship equilibria," which deepens intimate relationships among one another equally. The analysis shows how multiplayer interactions occur within Japanese and Chinese workplaces and provides a starting point for a broader understanding of the equilibrium of the various forms of participation that can occur.

Keyword

participation framework, participation form, native speakers of Japan and China, collaboration equilibria, spectatorship equilibria

1. はじめに

日本人社員と中国人社員が日本語で話しても「盛り上がらない」という感想を、日本人社員が漏らすことがある。日本人同士で話すときは、笑いや相づちなどで双方盛り上がる場所でも中国人と話す時はそうした感触が得られないという印象である。このように異なるコミュニケーションスタイルを持つもの同士がインタラクションすることによるずれや違和感の分析が求められている。

これらのインタラクションの分析で最も示唆を与えるのがGoffmanの一連の研究である(Goffman (1963=1980) 他)。Goffman (1963=1980) では、相互行為(インタラクション)を「焦点の定まらないもの」(unfocused)と「焦点の定まったもの」(focused)に分類し、焦点の定まらない場面にかかわりのある活動にたずさわることを「関与」(involvement)、焦点の定まった相互行為に参加することを「参与」(participation)とした。そして「発言が多様に受け取られ、個人が多様な参加状態を持つ循環(circle)」を参与枠組み(Participation framework)¹と定義した(Goffman 1981: 226)。更にGoffman (1967=2012)は社会的相互行為における儀礼的要素の修正プロセス(corrective process)の一部として、均衡

(equilibrium)な形態を提示している。インタラクションにおける参与枠組みは、話し手と聞き手のステータスを分析する際の鋳型として様々な分野に応用され、発展してきた(高梨 2016, 難波 2017他)。そのため、本研究でもこれらの「参与」、「関与」、「均衡」の概念を用いて分析を行う。

日中会話場面での盛り上がらなさを分析するために有益な研究として難波(前掲)がある。難波は参与形態の在り方について検討し、会話参与者全員が会話に積極的な関与を示す「均衡」な参与形態と、会話参与の積極性にばらつきがみられる「不均衡」な形態があることを指摘した。そして会話情報の共有状況によって参与形態の均衡性に差がでることを示し、それらの差はフッティングの出現の異なりによって説明されている。日中の「盛り上がらなさ」は会話への参与のあり方、均衡性の異なりに基づくものである可能性があるが、難波は日本語以外の話者についての検証がなされていない。また、性差についても言及していない。そこで、本研究では参与枠組みの汎用性の検証並びに枠組みの精緻化を目的とし、インタラクション分析の枠組みに基づいて、日中母語場面での多人数会話インタラクションにおける参与形態のあり方を明らかにする。

2. 先行研究

会話とこれを取り巻く日常生活場面とのかかわりについて、Goffman (1963=1980) は「焦点の定まらない相互作用」(unfocused Interaction) と「焦点の定まった相互作用」(focused Interaction) を提唱した。「焦点の定まらない相互作用」では人びとが単に同じ社会的状況に居合わせるというだけで生じるコミュニケーションの問題である。一方「焦点の定まった相互作用」は、一群の個人がお互いに特別の関心をはらい、特別の相互作用を持続するコミュニケーションの問題である (Goffman 1963=1980:93)。「焦点の定まらない相互作用」について、Goffmanは次のように解説している。

焦点の定まらない相互作用では、どの参加者も公式には「発言権」を与えられていない。そこには注目の焦点になるような公式の中心人物は誰もいない。(中略)しかし、焦点の定まらない相互作用では、すべての行為はすぐ近くにいるすべての人のためになされているかのように感じられるものである。(Goffman 前掲: 38-40)

したがって、その場面にかかわりのある活動にたずさわるとは、そこでの活動に「関与」(involvement) することであるとGoffmanは指摘する。また「焦点の定まった相互作用」についてのGoffmanの説明は次の通りである。

(前略) 焦点の定まった相互作用の一部を対面的かかわり、あるいは出会いと呼ぶことにする。対面的かかわりとは同じ状況に居合わせた二人、またはそれ以上の人びとがお互いに一緒になって単一的知覚的・視覚的焦点を維持しようとするすべての場合を含む。(Goffman 前掲: 99)

つまり「焦点の定まった相互行為」に参加することは「参与」(participation)²である。また高梨 (2016: 127) は「関与」と「参与」は相互行為の中に密接な関係があり、ある主体がある瞬間に関与している活動は一つとは限らない、会話に参与することも関与の一種であると指摘している。

本稿ではGoffmanの「参与」、「関与」理論を援用する。表1は参加者・関与者の枠組と役割を示している。本研究では、参加者の枠組みを用いて分析を行っている。

均衡・不均衡の概念について、Goffman (1967: 19= 2012: 18) では社会的相互行為における儀礼的要素の修正プロセス (corrective process) の一部として、均衡 (equilibrium) な形態が提示され、下記のように述べられている。

(前略) 行為の記号的成分を通じて、行為者は自分がいかに敬意を受けるに値するかを示し、また他人たちが敬意を受けるに値するとその行為者がどれほど考えているかを示すわけだが、そういう記号的成分をもった行為を、わたしは儀礼 (Ritual) と呼ぶことにす

表1 参加者・関与者の枠組みと役割 (Goffman 1963=2012, 高梨 2016を筆者改編)

参加者の枠組と役割	関与者の枠組と役割
<ul style="list-style-type: none"> ・ P: Participant 参加者 { <ul style="list-style-type: none"> ・ S: Speaker 話し手 ・ R: Recipient 受け手 { <ul style="list-style-type: none"> ・ R1: Recipient of Addressee 受け宛て手³ ・ R2: Recipient of Unaddressee 受け非宛て手⁴ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ I: Involvement 関与者 ・ B: Bystander 傍聴者 { <ul style="list-style-type: none"> ・ B1: Bystander of overhearer 漏れ聴き者 ・ B2: Bystander of eavesdropper 盗み聴き者

る。均衡という比喩がここでは適切である。

(Goffman 1967: 19=2012: 18)

つまり均衡というのは相互行為における参与者同士が敬意を示しあう儀礼といえる。難波(2017)では相互行為の社会言語学的な視点に立ち、日本人4名で構成される会話データの分析を通して、肯定的で積極的な関与に向けた会話のプロセスの解明を目指すと同時に、それに向けた聞き手の役割を検討した。またこの分析から積極的な関与につながる言語及び非言語行動の特徴を特定し、最終的には聞き手の参与形態の柔軟性について論じた。分析の方法としては、会話参与者間の会話情報の共有状況、話し手と聞き手のフッティング、会話に対する積極的な関与の示し方を検討し、実際の会話例から、聞き手の中でも受け手⁵と傍参与者⁶の間で参与形態に差が生じることがあることや、消極的な傍参与者の参与も会話の流れの中で流動的に、柔軟に変化する様子を検証した。また「均衡」と「不均衡」な参与形態をそれぞれ次のように定義した(下線は筆者)。

参与者同士がやりとりを通じて親密さや親睦、そして共感を深めていくプロセス全体をみていくためには、特に受け手や、会話への参与が承認されているものの、直接的な受け手にはならない傍参与(Clark & Clark 1982)の両者を含めた聞き手が積極的な関与を示す「均衡」な参与形態と、ある聞き手は積極的な関与を示さない「不均衡」な参与形態(中略)がある。(難波 2017: 111)

難波(前掲)は(積極的な関与を示す)均衡な参与形態の具体例としては、「受け手全員による同時笑い、ジェスチャー、発話の共同構築、共感の繰り返し」などを挙げている。一方、(積極的な関与を示さない)不均衡な参与形態の具体例に、「受け手の中に会話を聞いてはいるものの反応することはなく、話の内容についていけてない、下を向いたり笑顔が出ない」などが取り上げられた

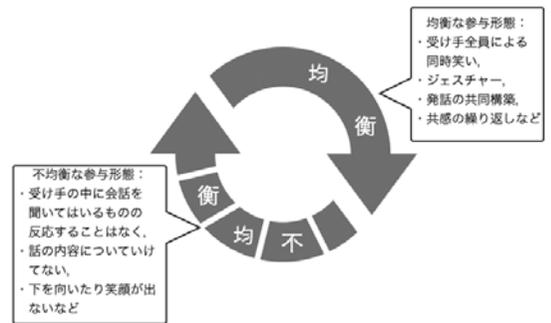


図1 会話インタラクションにおける均衡・不均衡な参与形

(難波 2017を基に筆者が作図、緑の矢印は会話の流れを示す)

(図1)。上述の相互行為を踏まえ、難波は会話情報の共有状況によって参与形態の均衡性に差があることを示し、それらの差はフッティングの出現の異なりによって説明されている。しかし、難波は日本人話者の会話分析しか行っていないため、他の言語話者においても同じことが言えるかは検証されていない。また、性差についても言及していない。

3. 本研究の目的

本稿はマルチモーダルコミュニケーションの観点から参与枠組みの汎用性の検証並びに枠組みの精緻化を目的とし、日中母語場面での多人数会話インタラクションにおける参与形態のあり方を明らかにする。具体的には、日中ペアの自然会話の質的な分析を通じて、多人数インタラクションでは、言語の異なりによって、均衡な参与形態の中で異なる選好傾向が見られること、特に性差が均衡性の異なりにかかわっている可能性を示す。

参与形態の均衡性については、これまでの研究の蓄積が少なく、特に均衡性の質的な相違についての検討は管見の限りでない。そこで本研究では①日中多人数インタラクションには参与形態の均衡性に異なりがあるか、②あるようであれば、その質的な異なりにはどのような特徴があるのか、という二つの問いをたて、日中それぞれ類似したグ

表2 JPG参与者情報

参与者	A	B	C
年齢	35	29	32
性別	男性	女性	男性
勤務年数	13	8	10
職階	主任	職員	職員
関係	先輩	後輩	後輩

表3 CNG参与者情報

参与者	A	B	C
年齢	34	33	34
性別	男性	女性	男性
勤続年数	12	11	12
職階	部長	主任	課長
関係	上司	部下	部下

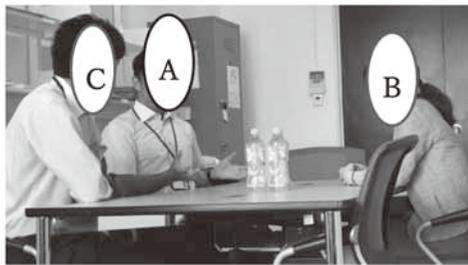


図2 会話インタラクション場面 (左JPG, 右CNG)

ループの自然会話データを収集し、参与形態の均衡性の異なりについて質的に分析する。その結果を受けて、有用性の高い仮説を提示する。

4. 調査概要及び分析方法

4.1. 調査概要

調査時期は2019年5月から2019年7月までで、調査地は日本の金沢市と中国の天津市である。調査対象者は日本人グループ（日本語を母語とする日本在住者、以下JPG）と中国人グループ（中国語を母語とする中国在住者、以下CNG）、使用言語は母国語である。参与者の年齢、性別、人数及び関係性は、両グループともに30代前後の男女3名により構成され、親しい間柄（仕事外での交流あり）である。また参与者の業種・職種は、両グループともに教育機関に勤務する総務部の職員である。参与者の詳細情報を表2と表3に示す。図2にJPGとCNGによる会話インタラクションの場面を示す。

4.2. データ収集の方法

データ収集の方法については、楊（2020）のリサーチデザインを参照し、下記の通りに実施した。表4にデータ収集の概要を示す。収録場所はJPGが勤務先の研究室、CNGが職場近くのカフェである。録画に使用された機材はiPhoneXとICレコーダー（SONY ICD-UX523F）である。撮影者である筆者は同席し、少し離れた場面（参与者Aの正面）から撮影を行った。ミーティングのテーマは参与者同士で決めてもらい、なるべく普段通

表4 データ収集の概要

参与者	日本人グループ (JPG)	中国人グループ (CNG)
収集場所	勤務先の研究室	職場近くのカフェ
収集方法	スマートフォン (iPhoneX) による動画収録	
使用言語	日本語	中国語
人数	3人	3人
話題	職場の人事、休暇予定等	職場の人間関係、学生指導等

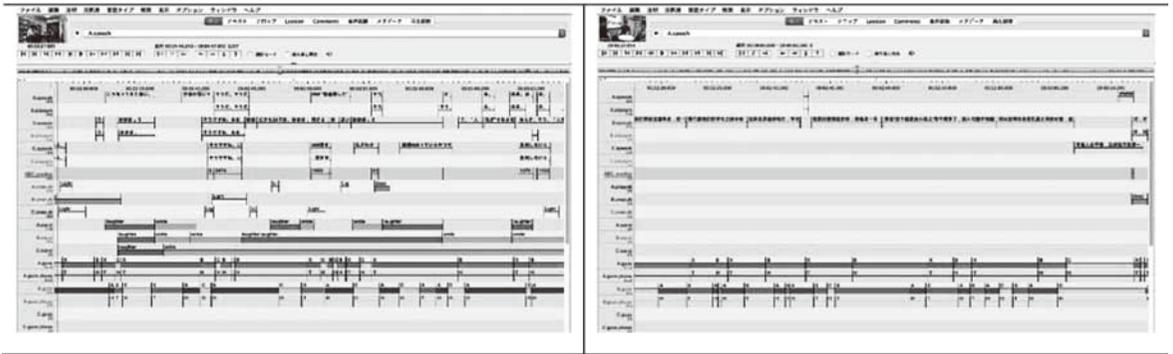


図3 ELANアノテーション画面（左JPG, 右CNG, 各50秒間）

りに実施するように依頼した。その結果、JPGは職場の人事と休暇予定について、CNGは職場の人間関係と学生指導についての話題が選ばれた。収録後に、録画データを元に参加者の発話意図や受け手の感想、及び参加者同士の人間関係や職場環境等について、フォローアップインタビューを行った。また、データ分析中にも、不明点について直接参加者に尋ねることができた。実際に分析に用いたデータは録画開始後5分～10分の間であるが、一通りの話題が終了するまでの発話を分析対象とした。これによりJPGは5分11秒、CNGは5分17秒となった。

4.3. 分析の方法

動画解析ツールELAN (Sloetjes & Wittenburg

2008)⁷を用いて発話の文字化とアノテーションを行った。図3にアノテーション画面を示す。

発話内容の注釈について、日本語の発話単位は宇佐美 (2019)、中国語の発話単位は宇佐美他 (2007) に従って分割した。アノテーションを行う際に、参加者A (男性・上司)、参加者B (女性・部下)、参加者C (男性・部下) の注釈層を作成し、それぞれの参加者の注釈に下位分類としての注釈層をつけた。分析に用いたタグは言語情報における発話 speech, 相づち・共感 aizusym, オーバーラップ overlap, 非言語情報における頷き unazuki, 笑い warai, 視線 gaze direction の6種類である (表5)。測定方法については、楊 (2020) を参照しそれぞれの頻度と時間長を測定した。

表5 分析に用いる上位タグと下位タグ

	上位タグ	下位タグ
言語情報	発話内容 speech 相づち・共感 aizusym オーバーラップ overlap	
非言語情報	頷き unazuki	Deep nod (深い頷き) Light nod (浅い頷き)
	笑い warai	Laughter (笑い声あり) Smile (笑い声なし)
	視線 gaze direction	特定 (参加者A・B・Cへ) 不特定 (その他の所Xへ)

4.4. 分析に用いるタグの設定について

本稿ではELANのアノテーション項目として、参与形態の均衡性に関わる要素を、発話内容、相づち・共感、オーバーラップ、頷き、笑い、視線の6種類に設定した。難波 (2017: 111) によれば、均衡な参与形態は「参与者同士がやりとりを通じて親密さや親睦、そして共感を深めていくプロセス全体」であるため、発話内容と相づち・共感はその表現形式と考えられる。Goffman (1981: 128) は相互行為における参与者間のスタンス、姿勢、投影された自己像などによる整合 (alignment) を「フットィング」(footing)⁸と定義した。フットィングのシグナルとしてGoffman (前掲) は、発話内容といった言語情報、及び音のピッチやボリュームといったパラ言語情報を示した。難波(前掲) はジェスチャー、頷き、笑いや笑顔といった非言語情報もシグナルに含めている。さらにケンドン (1967) では視線は「モニター (monitoring)」, 「感情表出 (expressive)」, 「会話調整 (regulation)」といった機能が備えられ、フットィングの重要な非言語情報シグナルと考えられている。そのため、以下、それぞれの要素の定義と分類・機能、及び抽出方法について説明する。

言語情報は、発話内容、相づち・共感、オーバーラップの三つで構成される。発話内容は実際の会話内容を文字化し、分析を行った。会話内容のトランスクリプトは、使用した記号及びその意味には、日本語は宇佐美 (2019) 「基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2019年版」とJefferson (2004) に従い、中国語は宇佐美他 (2007) 「BTS中国語版 (BTSC) 2007年」に従って行った⁹。相づち・共感の高梨 (2016)、田中 (2001)、筒井 (2012) に基づき、本稿に用いる相づち・共感の表現形式及び例をそれぞれ表6と表7のように設定した。相づちはメイナード (1993: 58) を参照し、「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現」と定義した。相づち機能には、「話の進行を助ける」(水谷 1988), 「聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える」(堀口 1997) や「話し手に対して続けてくださいと合図してい

表6 相づちの表現形式の分類及び例
(高梨 2016:48の抜粋)

No.	分類	例
1.	応答系感動詞	「ああ」「うん」「ええ」「はい」など
2.	感情表出系感動詞	「あっ」「あー」「えっ」「ふうん」「へえ」など
3.	語彙的応答	「なるほど」「確かに」「そう(ですな)」「ね」など
4.	評価応答	「すごい」「おもしろいな」「こわ」など
5.	繰り返し	「でも三月、箱根」→「箱根」
6.	共同補完	「目のつけどころが」→「違うでしょう」

表7 共感に関する表現形式の分類及び例
(田中 2001, 筒井 2012を元に筆者作表¹⁰)

No.	分類	例
1.	相手の心情に賛意を示す	その気持ちよくわかる。 <u>んん。</u>
2.	相手の心情を推測して確認する	靴を倒すな <u>ーみたい</u> な?
3.	相手の心情を先取りする	不安になる <u>よね。</u>
4.	相手の心情を受け入れて確認する	あたしもすごく不安になる <u>わ。</u>

る」(高梨 2016) などがある。共感 (sympathy) には、釜田 (2017: 30) を参照し、「相手の考えや気持ちを理解して、相手の期待に添おうとする態度」と定義した。また共感の機能は、「他者の感情の代理的経験、あるいは共有を伴う」(澤田 1992)」と定義されている。このように、相づちと共感とは相手の気持ちを理解し、寄り添うといった発話機能に共通しているため、参与形態の均衡性に関わる要素としては同じカテゴリーでの分析が適切と考え、一つにまとめて分析を行なった。

オーバーラップについて、黒崎 (1995) は会話参加者が相手への共感を示すために共調的に発話に割り込んだり、オーバーラップしたりすること



図4 笑いの場面 (JPG 例: 左 Laughter, 右 Smile)



図5 深い頷きの場面 (JPG 例: Deep nod)

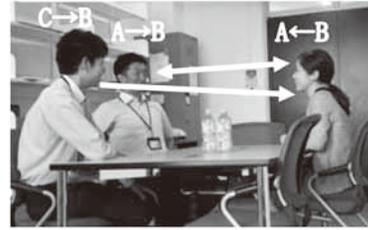


図6 視線方向の場面 (JPG 例: gaze direction)

があると述べている。このように相づち・共感、オーバーラップの表現形式は会話インタラクションの均衡性を構築・維持するのに欠かせないメッセージと考える。オーバーラップはELANのオーバーラップの自動測定機能を用いた。

次に非言語情報について説明する。まず、笑いは発声を伴う笑いのことをLaughter, 声を伴わずにニコリと歯を見せる微笑みの表情をSmileに分けて分析する。図4で会話インタラクションに現れたLaughter (笑い声あり) とSmile (笑い声なし) の実例を示す。

頷きは、頭を上下に振る行為であり、話し手の言動に対する頷きの深さとその回数を計測した。前頭部を見せている頷きは「深い頷き」(Deep nod) とした。その他の頷きは「軽い頷き」(Light nod) とした (図5)。

視線は会話参加者に視線を向けることが相手への関心を示すサインとなり、情報の共有に関わるシグナルと考えられる。そのため本稿では、視線の方向を特定 (参加者のA・B・Cへ) と不特定 (その他のXへ) に分けて目視で視線の方向とその時間を計測した (図6)。

5. 結果と考察

5.1. 発話による参与形態の異なり

表8にJPGとCNG各話者の発話頻度、時間長及び全体に占める割合を示す。まず発話の頻度を分析した結果、JPG (A=63回, B=56回, C=47回) はCNG (A=35回, B=32回, C=16回) よりいずれも頻度が高かった。また全体に占める割合はJPG (A=38%, B=34%, C=28%), CNG (A=42%, B=39%, C=19%) となり、JPGはCNGより各話者の発話頻度のばらつきが少なかったことがわかった。

次に発話の時間長について分析した結果、全体に占める割合が最も高いのはCNGの話者Bであった。そのため、CNGの女性参加者はより長い時間発話をしていたことが分かった。そして発話全体の時間長では、JPG (412.8秒) はCNG (333.3秒) より話者の合計発話時間が長かった。その理由は会話中にJPGが多出するオーバーラップや同時笑いが多いたことが関係していると考えられる¹¹。なおそれぞれのグループの発話比率においては有意な差は見られなかった。

次に、日本人各話者と中国人各話者における、一発話あたりの発話時間長に差があるかを対応な

表8 JPG・CNG各話者の発話頻度、時間長及び全体に占める割合

	頻 度				時 間 長			
	JPG		CNG		JPG		CNG	
	回数	割合	回数	割合	秒数	割合	秒数	割合
A (男・上司)	63	38%	35	42%	154.3	37%	109.4	33%
B (女・部下)	56	34%	32	39%	138.5	34%	143	43%
C (男・部下)	47	28%	16	19%	120	29%	80.9	24%
合 計	166	100%	83	100%	412.8	100%	333.3	100%

表9 JPG・CNG各話者の一発話あたりの発話時間長の平均と標準偏差

	JPG (秒数)		CNG (秒数)	
	一発話時間長の平均	標準偏差	一発話時間長の平均	標準偏差
A (男・上司)	2.4	1.4683	3.1	2.2436
B (女・部下)	2.5	2.3004	4.5	2.9092
C (男・部下)	2.6	2.1440	5.1	3.2591

しの一元配置分散分析 (One-way ANOVA) で検討した(表9)。結果は $F(5, 242) = 7.023, p < .001$ で有意であった。次にボンフェローニの方法¹²を用いて多重比較を行なったところ、JPGの話者AとCNGの話者C ($t = 4.0860, p = .0001$), JPGの話者AとCNGの話者B ($t = 4.0651, p = .0001$), JPGの話者BとCNGの話者C ($t = 4.0485, p = .0001$), JPGの話者BとCNGの話者B ($t = 4.0015, p = .0001$), JPGの話者CとCNGの話者C ($t = 3.7968, p = .0002$), JPGの話者CとCNGの話者B ($t = 3.6566, p = .0003$), CNGの話者AとCNGの話者C ($t = 2.8408, p = .0049$)の間で、有意差が確認された。つまり日中間において、中国人話者BとCは日本人各話者より一発話あたりの発話時間長が有意に長いことが明らかになった。また中国人話者間において、話者Cは話者Aより一発話の時間長が有意に長いことがわかった。

また一発話あたりの発話時間長の標準偏差(S.D.)について、中国人各話者 (A=2.2436, B=2.9092, C=3.2591)は日本人各話者 (A=1.4683, B=2.3004, C=2.1440)より大きかった(表9)。このことから、日本人各話者における一発話の時間長が短くまとまっている一方、中国人各話者の一発話の時間長

には長いものも含みつつ、ばらつきもあることが読み取れる。

JPGとCNGの会話インタラクシオンによる参与形態の代表的な例を図7と図8に示す。二重下線部は筆者が追加したもので、相づち・共感を記している。

まずJPGの事例から考察する(図7)。例1の参与者Cの発言に対して受け手Aが<(笑いながら)伸びしろが>を繰り返す、それから受け手Bが終始協働的に<ははは(笑い)>と笑っている。例2は参与者Cの話について、受け手AとBは面白いと感じ、相づちと笑いで反応している。例3の場合は、参与者Bの発言に対して、受け手AとCはオーバーラップしながら、相づちを打っている。

次にCNGの事例(図8)について、例4では参与者Cの発言に対し、受け手Aは<対(そうです)>と同意し、また受け手Bは最後まで注視しながら傾聴している。例5では参与者Aの質問に対し、Cも同一意見<対(そうです)>を述べ、さらにBは問題の所在は<在于你个人(問題は個人にある)>と話題を「仕事から個人へ」展開している。例6は参与者Cの意見に対して、受け手

表10 JPG・CNG参加者全員による発話オーバーラップの頻度と時間長

ABCの発話 オーバーラップ	頻度 (回数)		時間長 (秒数)	
	JPG	CNG	JPG	CNG
	38	2	29.2	0.2

は同意発話，注視行動が用いられている。

表10は，JPG・CNG参加者全員による発話オーバーラップの頻度，時間長を示している。JPGの全参加者によるオーバーラップの頻度と時間長（38回，29.2秒）はCNG（2回，0.2秒）より高く長いことがわかった。

5.2. 言語・非言語情報による参与形態の特徴

JPGとCNG各参加者による「相づち・共感」の頻度と時間長，及び全参加者による発話の「オーバーラップ」の頻度と時間長について分析を行った。その結果，CNGよりJPGのほうが高頻度で長時間であった（表11）。表12はJPGとCNG参加者による非言語情報の特徴を示している。JPGは

表11 JPG・CNG参加者による言語情報の特徴

言語情報の 特徴	頻度 (回数)		時間長 (秒数)	
	JPG	CNG	JPG	CNG
Aの相づち・共感	43	10	89.2	9.2
Bの相づち・共感	28	6	41.7	11.9
Cの相づち・共感	34	3	72.3	3.4

CNGより参加者らは高頻度且長時間笑ったり頷いたりしていることがわかった。特にJPGの女性はCNGよりスマイルと浅い頷きの頻度も多く，時間も長かった。これらの数値の高さは，JPGが積極的に会話に関わろうと，また共感的・協働的な会話インタラクションを創り上げているエビデンスといえる。

視線の全体的な傾向としては，CNGはJPGと異なり，聞き手が発話者を注視し，傾聴する傾向が見られた。更に参加者Aの視線の方向と注視時間について量的な分析を行ったところ，CNGとJPGの傾向に異なりが見られた。視線の方向については，CNGがJPGより視線の方向を特定している時間割合が高かった。これより，CNGはJPGと比べ会話参加者への注視時間が長いと言える（表13/図9）。

JPGとCNGの参加者同士は其々会話に参加しており均衡的なインタラクションを構築していた。しかし，その質が異なっていた。発話のターンを持っていて主導的に話を進めている話し手（参与

表12 JPG・CNG参加者による非言語情報の特徴

非言語情報の 特徴	頻度 (回数)		時間長 (秒数)	
	JPG	CNG	JPG	CNG
Aの笑い	18	1	73.4	2.6
Aの頷き	21	1	31.7	0.5
Bの笑い	35	0	162.1	0
Bの頷き	28	5	82.2	4.7
Cの笑い	9	0	112.1	0
Cの頷き	32	2	59.6	1.2

表13 (左) / 図9 (右) JPG・CNGの参加者Aによる視線の方向

参加者A	JPG		CNG	
	特定	不特定	特定	不特定
視線の方向				
時間長 (秒数)	145	164.4	239.3	75.2
割合	46.86%	53.14%	76.09%	23.91%

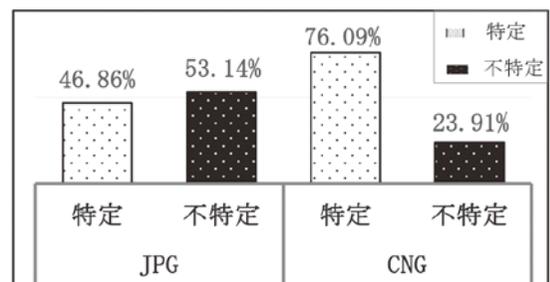


表14 JPGとCNGが選好する均衡性及びその意味

	選好する均衡性	意味
JPG	協働型均衡	会話インタラクションの受け手は、頻繁な相づち、共感表現やオーバーラップの使用、また頷きや笑いといった動作行為の利用によって、話し手と受け手が協力的・動的にインタラクションを構築していく参与形態
CNG	観賞型均衡	会話インタラクションの受け手は、話し手との発話行為や注視行動を通じて、意見を交わし問題の解決を目的として、話し手と受け手が親密な関係性を相互的・対等的に深めていく参与形態

者A)は発話時間長の差がないが、受け手(参与者B・C)に回った時に差が出た理由は、JPGの発話の受け手による細切れ発話(相槌等)やオーバーラップが多いことによると考えられる。またJPGは「相づち・共感」、「オーバーラップ」といった言語情報、また「笑い」、「頷き」といった非言語情報について、CNGより出現頻度が高く時間長も長いことが分かった。とりわけJPG女性参与者はCNGの女性参与者より頻度も時間の差も大きかった。一方CNGはJPGより他の参与者への注視時間が長く、傾聴的に会話に参加していた。

つまり、JPGの場合、会話インタラクションの受け手は、話し手と受け手が協力的・動的にインタラクションを構築していく「協働型均衡」の参与形態を選好する傾向がある。一方、CNGは会話インタラクションの受け手は、話し手との発話行為や注視行動を通じて意見を交わし、話し手と受け手が関係性を相互に・対等に深めていく「観賞型均衡」の参与形態を選好する傾向があるのではないだろうか。以上のことを表14にまとめる。

そしてJPGとCNGの参与者に分析に用いる2つ動画を見てもらい、「会話が盛り上がっていると

思うか、その理由は何か」というフォローアップインタビュー調査を行った。まずJPG代表者の回答は「JPGは盛り上がっているように思います。理由はJPGがみんな笑顔で会話しているため、楽しく盛り上がっているように見えた。」「CNGは左右の2人が少し硬い表情のため、盛り上がっているようには見えなかった。」であった。それからCNG代表者の回答は「2つのグループとも盛り上がっていると思います。理由はJPGが良い雰囲気楽しいそうです、盛り上がっているように思います。」¹⁶、「CNGは雰囲気がよかったです、楽しく話をしていました。」¹⁷であった。

このように、日本人から見たCNGの会話は盛り上がっていないが、中国人からみれば、いずれも楽しそうに話をしていたため、良い雰囲気に思えた。つまり多人数インタラクション場面における参与形態の均衡性に選好の異なりがあるからこそ、上記の回答があったと思われる。

しかし、今回は日中それぞれ1グループの多人数会話場面を用いて、考察を行ったものである。日中職場における会話インタラクションの代表的な例ではあるが、その全体像を反映しているわけ

表15 会話インタラクションにおける均衡・不均衡な参与形態及び想定される選好性

	対話	傾聴	協働	選好性
対話型均衡	+	+	-	中国・日本
協働型均衡	-	-	+	日本・ビジネス場面
対話・協働型均衡	+	-	+	日本・親しい関係
観賞型均衡	-	+	-	中国・ビジネス場面
消極的不均衡	-	+・-	-	日本・親しい関係
積極的不均衡	-	-	-	日本・中国

ではない。とりわけ参与形態の均衡性について、「協働型均衡」、「観賞型均衡」以外に、「対話型均衡」や「対話・協働型均衡」といった実態も考えられる。対話（発話内容）、傾聴（静かに聴く）、協働（相づちや頷き）の3つの指標にフォーカスし、それぞれの特徴及び選好性について表15に示す。

「対話型均衡」の特徴は、公平にターンテイキングが頻繁にあり、発話内容面においても均衡し、全員が積極的に意見を述べるが、その時にあいづちなどはない。日本も中国も選好される均衡的な参与形態である。それに対して、「協働型均衡」の特徴は、同時発話や伴走的な相づちがよく見られ、発話内容面において不均衡が生じ、動的に傾聴しているが表面的な均衡である。日本のビジネス場面でよく見られる。「対話・協働型均衡」は、公平性を持って発話を行い、傾聴や協働も均衡に表出している参与形態である。日本の親しい間柄のグループ会話によく見られる。一方、「観賞型均衡」にはターンテイキングがあまり起こらない、話す人と聞く人が固定化され、動かない傾聴的な態度が特徴の参与形態である。中国のビジネス場面では優勢化している。「消極的不均衡」の特徴は会話に参加しているものの、発話や反応がなく、傾聴しているか否かは明確的ではない状態である。日本の親しい関係のグループ会話で見られる

参与形態である。「積極的不均衡」の特徴としては、発話に参加せず、他のもの（スマートフォンなど）に関心を寄せている状態であり、日本でも中国でも想定される不均衡な参与形態である。中国ビジネス場面に用いる「観賞型均衡」と日本親しい関係のグループミーティングに見られる「消極的不均衡」は共通点が多いため、異文化やビジネスコミュニケーションの場に誤解が生じうると考える。図10では日本と中国の多人数インタラクションにおける均衡・不均衡な参与形態の選好一例を示す。

6. まとめ

本研究は日中母語場面での多人数会話インタラクションデータを質的・量的に分析することで均衡・不均衡な参与形態の質的な異なりを明らかにした。難波の定義に従うと、CNGの参与形態は聞き手が無反応で（怒っているかのように）聞いているだけのことが多いため、不均衡な参与形態といえる点が多いが、実際には積極的に参与している。そのため本研究では均衡と不均衡にそれぞれ二つの質的な異なりがあることを示した。

まず均衡性については、話し手と受け手の発話境界があいまいで、参加者のオーバーラップや短い発話や細切れ発話が多発する「協働型均衡」と、話し手と受け手の発話が明確に分離され、受け手

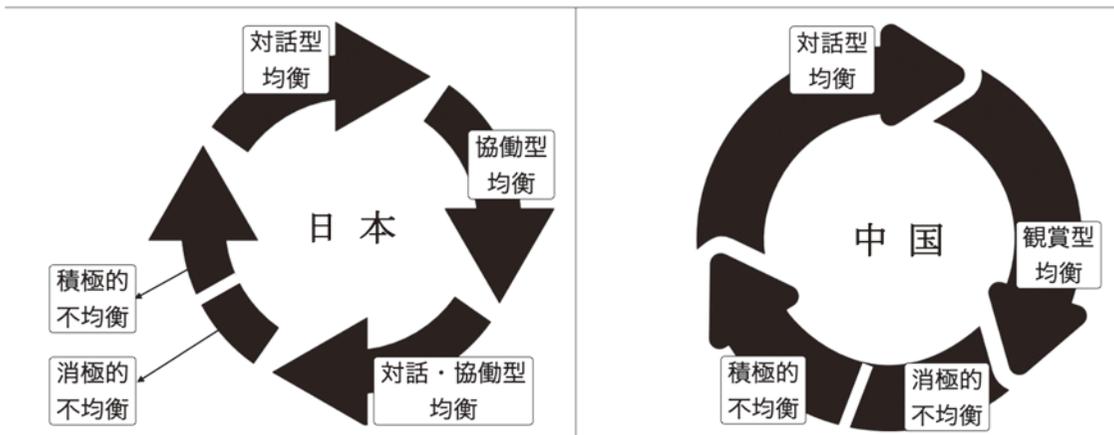


図10 会話インタラクションにおける均衡・不均衡な参与形態の選好一例（左：日本，右：中国）

に立つときは無言で注視行動を行う「観賞型均衡」と分ける必要があることを述べた。そして、JPGは「協働型均衡」の参与形態を選好し、CNGは「観賞型均衡」の参与形態を選好傾向がある可能性を示した。それから不均衡な参与形態を「積極的不均衡」と「消極的不均衡」に分けられる。「積極的不均衡」の場合は、その場にはいるが、会話に参加せず、姿勢を参与者から背け、スマートフォンを操作したり、目線を合わせない状態となる。「消極的不均衡」の場合は、態勢としては参与しているが、参与していた時は見られた頷きや相槌、質問がなくなり、頷くべき場で、反応や発話がなくなったり、視線を逸らしたり笑顔が出なくなる参与形態である。ほんやり様子を見ている状態である。難波(2017)におけるJPGの不均衡な参与形態は消極的不均衡ではないだろうか。

中国語話者の場合、視線が発話者に向けられ、話が理解できているなら、均衡な参与形態となる。こうした均衡性の質的な異なりにより、コミュニケーションにずれが生じているのではないだろうか。このように、日本人同士の会話インタラクションは「協働型均衡」がベースであり、参与者の一人でも無言又は無反応になった途端に、不均衡な参与形態だと認定されてしまう。

そのため、日本人社員と中国人社員の交流は盛り上がりならず、両言語文化に共通する均衡な参与形態の空間が形成されにくい実態になると思われる。とりわけ発話の頻度、笑い・頷きの頻度と時間長について、いずれもJPGの女性がCNGの女性より高いことから、日本人女性は協働的に多数数インタラクションの均衡性に貢献しているといえよう。

最後に今後の課題について述べる。今回は日中それぞれ1グループの多数数会話場面を用いて、考察を行った。そのため、会話インタラクションの全体を反映しているわけではない。例えば反対意見が多発するような、合意形成が困難な話題の場合は異なる結果となる可能性がある。また、参与形態の均衡性について、「協働型均衡」、「観賞型均衡」以外に、「対話型均衡」や「対話・協

働型均衡」など参与形態は異なる会話インタラクションに現れているように予測される。そのため、今後は異なる話題のデータを用いて、多言語文化圏における会話インタラクションの参与形態の均衡性と不均衡性について、その特徴並びに共通点・相違点を量的・質的に観察していきたい。

【注】

- 1 原文: participation framework, namely, the circle, ratified and unratified, in which the utterance is variously received, and in which individuals have various participation statuses. (Goffman 1981: 226)
- 2 高梨(2016: 123-124)を参照する。
- 3 受け宛て手とは、話し手が話しかけている、又は視線を向けている受け手。
- 4 受け非宛て手とは、話し手が話しかけていない、又は視線を向けていない受け手。
- 5 難波(2017)による「受け手」は本稿の参与者枠組みの中の「受け宛て手」にあたる。
- 6 難波(2017)による「傍参与者」は本稿の参与者枠組みの中の「受け非宛て手」にあたる。
- 7 ELAN (EUDICO Linguistic Annotator)の基本機能は動画や音声資源に注釈をつけることである。複数の会話参加者の発話に対し、複数の注釈層を作り発話内容や非言語行動などの注釈をつけることも可能で、マルチモーダルコミュニケーションの研究を行う際には非常に効果的なツールである。
- 8 フットイングについて、ゴフマン(1981)は次のように記述している。
I have illustrated through its changes what will be called "footing". In rough summary:
1. Participant's alignment, or set, or stance, or posture, or projected self is somehow at issue. ...
4. For speakers, code switching is usually involved, and if not this then at least the sound markers that linguist's study: pitch, volume, rhythm, stress, tonal quality.... Goffman (1981: 128)
- 9 トランスクリプト記号の意味は宇佐美(2019)に

従った。具体的には以下の通りである。

“ ”	発話中に話者及び話者以外の者の発言等が引用された場合。
<>{<} <>{>}	同時発話されたものは、重なった部分双方を<>で括る。重ねられた発話には<>の後に{<}をつけ、また重ねた方の発話には<>の後に{>}をつける。
「 」	被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。
< >	笑いながら発話したものの笑い等。

- 10 田中 (2001: 56-58) では、相手の心情に共感を示す際に、「相手の心情に賛意を示す」と「相手の心情を推測して確認する」の2パターンに分類し、例えば「その気持ちよくわかる。んん。」「靴を倒すなーみたいなの?」といった事例を取り上げている。また筒井 (2012: 346-347) では、会話の事例を用いて、話し手の心情を先取りし、聞き手がそれを受け入れて確認することが共感であり、例えば「不安になるよね。」「あたしもすごく不安になるわ。」といった事例を用いている。下線部は筆者追加。
- 11 分析に用いたJPGとCNGの会話時間は、JPGが5分11秒、CNGが5分17秒となった。
- 12 Holm's Sequentially Rejective Bonferroni Procedure.
- 13 例5_CNG和訳 (筆者訳)。
01B: 私たちの学校には大きな問題があり、それは本業、基本的な<職務 (の遂行能力)>が弱まり、多くの場合は行政事務に重点が置かれている。02A: <そうです>|>|。03C: <注視>。
- 14 例6_CNG和訳 (筆者訳)。
01A: はい、今は (業務の) 重点が間違っていますよ、<今は>|<|。02C: <そうです>|>|。03B: 実は重点の問題ではないと思います、重点とは誰かという個人でしょう、(その人) どのようにバランスをとるとか、例えば「人名」のこと、私は彼と話をしました。
- 15 例7_CNG和訳 (筆者訳)。
01C: バランスを上手にとる人がいて、例えば行政関係の仕事をしてい<たら…>|<|。02A: <それは現れて>|>|きますか? 03B: <そうです>|>|。そうです…。チューターの仕事をやるかやらないか確かにみてもわからないです、担当する学生が問題こそ起こさな

ければ。

16 中国語の回答文: 感觉挺好的, 挺开心也挺热情的。

17 中国語の回答文: 气氛很好, 聊得很开心。

参考文献

- 宇佐美まゆみ『基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2019年改訂版』2019.
- 宇佐美まゆみ・肖婷婷・戴琦・高娃・李宇霞・仇曉妮「基本的文字化の原則 (Basic Transcription system for Japanese: BTSJ) の中国語への応用について」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』2007, pp.83-103.
- 釜田友里江『日本語会話における共感の仕組み－自慢・悩み・不満・愚痴・自己卑下の諸相』博士論文, 2017.
- GOFFMAN, Erving. *Encounters: two studies in the sociology of interaction*. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1961. (ゴフマン, E.『出会い: 相互行為の社会学』誠信書房, 佐藤毅・折橋徹彦訳, 1985.)
- GOFFMAN, Erving. *Behavior in public places: Notes on the social organization of gatherings*. New York: Free Press, 1963. (ゴフマン, E.『集まりの構造－新しい日常行動論を求めて』誠信書房, 丸木恵祐・本名信行訳, 1980.)
- GOFFMAN, Erving. *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. New York: Harvard University Press, 1974.
- GOFFMAN, Erving. *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1981.
- SLOETJES, H., & WITTENBURG, P. Annotation by category-ELAN and ISO DCR. *Proceedings of the 6th International Conference on Language Resources and Evaluation*, 2008.
- JEFFERSON, G. An exercise in the transcription and analysis of laughter. *Handbook of discourse analysis*, 3, 1985, pp.25-34.
- KENDON, Adam. Some Functions of Gaze-direction in Social Interaction, *Acta Psychologica*, 26, 1967, pp.22-63.
- 庵原彩子・堀内靖雄・西田昌史他・市川熹「自然対話における聞き手の反応と話し手のうなずき・言語情報・韻律情報との関係に関する予備的検

- 討]『情報処理学会研究報告』109号, ヒューマン
インタフェース研究報告, 2004, pp.93-98.
- 黒崎良昭「日本語コミュニケーション:「共話」に
ついて」『園田学園女子大学論文集』30巻・1号,
1995, pp.45-60.
- 水谷信子「あいづち論」『日本語学』7巻・13号, 明
治書院, 1988, pp.4-11,
- メイナード, K. 泉子『会話分析』くろしお出版,
1993.
- 堀口純子『日本語教育と会話分析』くろしお出版,
1997.
- 釜田友里江『日本語会話における共感の仕組みー 自
慢・悩み・不満・愚痴・自己卑下の諸相』博士論文,
2017.
- 笹川洋子『おしゃべりなポライトネスー 会話の中の
共話・話題の交換・笑い・メタファー』春風社,
2020.
- 澤田瑞也『共感の心理学: そのメカニズムと発達』
世界思想社, 1992.
- 高梨克也『基礎から分かる会話コミュニケーション
の分析法』ナカニシヤ出版, 2016.
- 田中妙子「会話における共感表明発話」『日本語と日
本語教育』30号, 2001, pp.51-60.
- 筒井佐代『雑談の構造分析』くろしお出版, 2012.
- 難波彩子「日本語会話における聞き手のフッティン
グと積極的な関与」竹岡邦好・池田佳子・秦かお
り編『コミュニケーションを梓づけるー 参与・関
与の不均衡と多様性』2017, pp.109-126.
- 楊一林「マルチモーダルな観点から見た日中ビジネ
ス場面の同調行動の異なり」『日本語音声コミュ
ニケーション』8号, 日本語音声コミュニケーショ
ン学会, 2020, pp.36-55.